

※ 一心欲見仏 不自惜身命

「いっしんよっけんぶつ一心欲見仏 不自惜身命」(新編開結 四三九頁)

は、法華經『寿命品』の『自我偈』の文で、

「一心に仏を見たてまつらんと欲して、みづか自ら身命を惜しまず」(同)と読みます。

仏果を一心に求めるためには身命を惜しまずに修行することが肝要である、ということです。

この文を日蓮大聖人の仏法から読むならば、そこには衆生の觀心に約した附文の辺と大聖人の法体に約した元意の辺が拝されます。

元意の辺とは、日蓮大聖人が結要付囑の大法を御所持あそばされたその立場から示された法体を拝することです。

すなわち『義浄房御書』に、

「寿命品の自我偈に云はく『一心に仏を見たてまつらんと欲して自ら身命を惜しまず』云云。日蓮が己心の仏果を此の文に依って顯はすなり。其の故は寿命品の事の一念三千の三大秘法を成就せる事此の經文なり、秘すべし秘すべし(中略)日蓮云はく、一とは妙なり、心とは法なり、欲とは蓮なり、見とは華なり、仏とは經なり。此の五字を弘通せんには不自惜身命是なり」(御書 六六九頁)

と仰せのように、その經文は寿命品の文底に秘沈されている久遠元初の本仏の仏因仏果の行相と三大秘法を成就された意義を説き顯すもの、と拝することです。

大聖人は「一心欲見仏 不自惜身命」の御精神に立たれ、法華經に予証されるあらゆる難を一身に受けられて法華經の文々句々を身読実証し、三大秘法を建立されました。

その三大秘法の当体は同抄に、

「一とは妙なり、心とは法なり、欲とは蓮なり、見とは華なり、仏とは經なり」とあるように、一心に仏を見たてまつる人は、すなわち妙法蓮華經であること、人即法、法即人、人法体一であることを御指南されています。

つまり、「一心欲見仏 不自惜身命」は、久遠元初の本仏の実修・実証を顯す經文であり、その「一心」は本仏大聖人の一念、南無妙法蓮華經であることを説いているのです。

次に附文の辺とは、仏道を成就するためには能化の仏と同様、私たち所化にも命がけの信心修行が肝要であるということです。

第二十六世日寛上人は『依義判文抄』に、

「初めの二句の中に『一心欲見仏』とは即ち是れ信心なり。『不自惜身命』とは即ち是れ唱題の修行なり、此れに自行化他有り、俱に是れ唱題なり」(六卷抄 九九頁)と仰せのように、「一心欲見仏」を信心に、「不自惜身命」を唱題に約され、自ら唱題に励み、他にも勧めていくよう御指南されています。

一心に仏を見たてまつらんとして南無妙法蓮華經と唱える信心と、身・命・財を惜しまぬ修行によつて仏道は叶えられるのです。

今、私たちの信心修行における「一心欲見仏 不自惜身命」とは、まさに唱題に励むこと。そして、折伏に邁進すること、と心得ましよう。